

85 誌上発表

福井崇蘭館旧蔵の古活字版医書

小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所

福井楓亭一榕亭一棣園一恒斎と続いた京都の名医・福井家は、珍書・書画・骨董に執心した希世の蒐集家であった。福井家の家系や蔵書蒐集経緯のあらましは昨年の本学会総会で発表し、さらに昨年10月には武田科学振興財団杏雨書屋で「福井崇蘭館の秘籍」というテーマで展示会を開いた。これは昨年、文化庁から福井崇蘭館の旧蔵医書154点、830冊の寄託を受けたからである。杏雨書屋の展示会（および『開館40周年記念図録』）では、そのうちの宋版・元版・明版の中国刊本を主とし、朝鮮本（李朝刊）・和刻本（室町期五山版）の展示は各1点に止まった。

日本における古活字本出版の文化的意義はここに説くまでもない。医学においても江戸時代初期、古活字版は医学知識の普及に大いに貢献し、日本医学の醸成を促した。活字版は整版に比して組版は簡便であるものの、次の版を組むためには前の組版を解体せねばならず、そのため印刷部数が少なく、しかも時代が古いこともあって残存率がきわめて低い。福井崇蘭館本中の古活字版の存在はこれまで全く世に知られておらず、その出現は斯学の進展に寄与するであろう。よって以下にそれを示す（順序は文化庁指定の番号順）。

- ①『脈経』10巻5冊（崇31）。西晋・王叔和撰。黒口。四周双辺、12行21字、有界。刊年不詳（慶長年間刊）。「三角氏図書記」の蔵書印がある。内閣文庫に同版本が存する。
- ②『神農本草経疏』30巻10冊（崇62）。明・繆希雍撰。黒口。四周双辺、11行21字（題辭は9行16字）、無界。「三角氏図書記」の蔵書印がある。刊年不詳であるが、字様からすると古活字版最後期、万治年間頃の刊と思われる。杏雨書屋・北京大学・米国会図書館に同版本がある。
- ③『（秘伝）活幼全書』9巻3冊（崇63）。明・銭大用撰。黒口。四周双辺、10行18字、有界。刊年不詳。活字印刷には異風がある。川瀬一馬『古活字版之研究』には未収であるが、杏雨書屋・宮内庁書陵部に同版本が存する。
- ④『難経本義』3巻1冊（崇103）。元・滑寿撰。黒口。四周双辺。序は10行16字、無界。本文は10行21字、有界。本書は刊記を欠くが、大東急記念文庫の慶長12年（1607）曲直瀬玄朔跋刊本と比較するに同版であるから、同年刊とみてよい。「平安堀氏時習斎蔵」「三角氏図書記」の蔵書印がある。
- ⑤『黄帝明堂灸経』3巻1冊（崇125）。撰者不詳。黒口。四周双辺、12行20字、有界。慶長13年（1608）刊。同版本が杏雨書屋・研医会などに、また慶長18年（1613）古活字版が成簀堂・日光天海に、あるいは慶長10年（1605）以前の古活字刊の証左となる残紙が杏雨書屋に存する。
- ⑥『（新鐫）雲林神穀』4巻1冊（崇126）。明・龔廷賢撰。黒口。四周双辺、12行20字、有界。慶長8年（1603）医徳堂守三刊本。同版本が宮内庁書陵部・旧安田ほかに、また元和6年（1620）古活字版が国会図書館・杏雨書屋ほかに存する。
- ⑦『歴代名医伝略』2巻2冊（崇150）。室町～江戸初期・吉田宗恂撰。白口。四周双辺、10行18字、有界。慶長3年（1598）刊。杏雨書屋・宮内庁書陵部・東洋文庫に同版本が存する。